新局玉石童子訓

巻十一

遠13
1279
26

山静如太古日長似少年

童子訓

曲亭翁口授編
一陽齋豊國画

新局玉石第三版自四十一回至四十五回全五巻

文溪堂

1879
26

新局玉石童子訓第三版附言

本編第三集第三十回ハ末朱之丞ガ住吉ノ岸松屋ヲ尋ヌル折。其路傍ノ尻掛酒肆ハ十三屋九四郎ハ邂逅セル段ハ他ノ年歳ヲ四十ヨリ下ノ方ベートアルハ當時朱之丞ガウチ見ル推量ヲ以テ云フ。九四郎實ニ是時三十歳許ノ方ベー。何トヲフブ後版第三十二回ハ至リテ九四郎ノ女兄臆禄ハ年二十五歳ニシテ身故リヌ。是年其子大江四郎ハ甫ノ九歳ニ是ヨリ亦八稔ヲ歴テ杜四郎十六歳ハ方ベー。時九四郎ハ朱之丞ハ相逢フ之已ガ宿所ハ留在ヲリ。ソノ時ニ臆禄猶世ハ在ラバ正ハ三十二歳ノ方ベー。九四郎ハ臆禄ノ弟ヲ呼ビ三十歳許ノ方ベーヲ人ハウチ見ハ其面影ノ老ヒタルヲ以テ弱冠ノ年ハ朱之丞ガ謬認テ四十ハ方ベー。ト思ヒシ第三十二回以下ハ九四郎ノ年齢ヲ幾歳ニトハ文ヲ付ケレバ看官思惑ハ欺ニ作者ノ評注ヲ聊略記ス。又

只その名のみ多く。本編三集の端像ハ幻泡法師とハ者見えず。其像賛ハ。
好り拾て生ハ里を去へきなり。この序ハ軒のまち風。とハ歌あれば看官ハ。
幻泡ハ福富大夫五郎と思ふべし。然るを今版第四十五回ハ至りて頭陀幻泡
とハ法師生ず。その幻泡ハ大夫五入道ハあらぬ。もの〻づゝ是別人なるを看官心
つけなくて訝り思ふもありぬべし。是等の疑惑ハ猶編を重て數十回の後
後ハ至らざれば必了解きがたかるべし。都て長編なる物の本ハ作者の意匠
深長なて前より知らるゝ者ハあらぬ其前より知らるゝハ初心の短筆ハ考く
あり。和漢の兀籍是より生ず。そをあげつらふハ論ずるハいとまなし
ゆえ彼津を問ふ人ありもあらば後竟ハ是をもて廣くして且深紀を知。筏ハもや
なるべくんと思ふも烏滸のそしりをまぬがれざるなり。
弘化二年乙巳凖月之吉　曲亭癡老識

新局玉石童子訓第三版自四十一回至四十五回總目録

○卷六之十一　第四十一回
觀音寺城衆少年呈武藝　引馬搶棒主僕懲朱之奴

○卷之十二　第四十二回
家傳刀子留両善少年　百金證書裂同居母子

○卷之十三　第四十三回
深夜捕盜賢郎全家寶　闇刀碎玉老賊創懺悔

○卷之十四　第四十四回
因果覿面囊金復故主　宿縁不空孤孀寓舊家

○卷之十五　第四十五回
示意見俠者奬先途　箴前愆頭陀許得度

義維重於君
命臨難共忘
厥身
長橋倭太郎
執券
象船筭弥
知量

生死の海におりゐ
なほ江のうりかうとう
身をはくし
半閑人
曾根見五郎平
宗玄
拘把村盆
九郎

舊泉流不竭
新司捲知清
御教書
福冨阿鍵
ふくとみあかぎ
一口鬼太夫
安倍やすまさ

高嶋長江
たかしまさーえ
玄同老人
津問屋集三
つとひやあつまぐら
旅人御宿仕い

狂婦有狂婦之勇何及侠者之雄哉
悠鎮
狂婦巨楳
きょうふめ
重出十三屋九四郎
さんやくしろう

高嶋硯吉郎
重出浪華四槌

和漢の稗史物の本の作者多く古人の姓名を嫁して一部の小説を作設るハ何ぞ。蓋編中の人物世わたりて婦幼も耳目を克熟る。将相勇士の類ゆゑ〳〵それ〳〵其一部の世界不立看官も亦據あらざれバ飽ぬ心地とおもへべし。是をもて事を故事に借て義を勸懲に作せるのゆゑの故に毛氏が琵琶記の評注に蔡邕を評せらく。後漢の蔡邕ゆゑの支〻。ものがたり是同名異人〻と見るべ〻といふハ其言老實に過ぎるに似たれども蒙昧の為に解んゆゑ實に是致言といふべし。然るを克思はざる者其正史に合ざると歳月の錯ゝを詰りて論ずるもあるハ笑ふべし。稗説傳奇架空の言只情態を寫し得て且善を勸め惡を懲すを作者の本意と做せ〻或ハ是を無用の技とし或ハ是を有用の物とも無用の中に有用あり。有用の中に無用あるにゆゑ好憎をもて褒貶せべ私論ゆゑ廣く〻ぞ取捨ハ人々の意表にあるべし。　曲亭老人重識

新局玉石童子訓巻六之十一

東都　曲亭主人口授編次

第四十回

観音寺の城に衆少年武藝を呈す　弓馬槍棒主僕朱之仝を懲す

復説辛踏吾足齋延明ハ次の日の早旦より末朱之仝とおそ観音寺の城内なる賀典膳政朝の宿所に赴く程に朱之仝の身装の早に整ひかさかりて袴ハ昨日阿夏の老芋が隣家より借りて来る時服と腰刀ハ五足齋ら副衣副刀を取出て被せもあり佩せもあり。頭顱ハ額髪を剃残して十六七なる少年の像くに作り做しけるに朱之仝ハ猶飽ざるもあり。悄地に母の鏡台なる白粉を取出て薄化粧さへあり。かゝ心術とそ奸悪なれども見ハ世に美少年なりけり。と謂思ふもあるべし。尓程に五足齋ハ朱之仝と相俱して政朝許

来ふれば政朝則客の間ふ召入れて其子志賀父政賢と共侶ふ出て朱之父ふ
對面を當下吾足齋へ遽しく額を衝て昨日御内意と羨まつり愚息
末朱之父晴賢を召俱しくそこいれとも果ぬふ朱之父へ膝行頓首をつ
けるふ迫りて政朝へ朱之父を熟々相るふ最優形るる少年なれへ憶
眉をうち顰て朱之父ふ向ひていはく和殿も豫ねれふけん今日の試數を晴
投ゆく國守高頼みづから御覧ぜらるるとのて當藩中るる武男の少年
四十名を擇出して弓馬撃剣槍棒白打各得る所どのそ勝負を定め
らる和殿へ員の外ゆて件の隊ふあら弘ども然だりの本事るるへ咱ら汲
引を致しがたし實ふ試數を願るやと問まそ朱之父頭を抬げそ然い武
藝へ好所ゆそ年八九の時よりして習ひ覚えども性鈍けまば人並ふ今猶
修行の最中ふ在り開ぐ中ふ弓馬のく人ふ讓るべくもいるまと雄々しく答ふ

卑下慨慢庸人るるまを笑へ政朝屡頷てそれでこそ安堵これ是
る拙郎志賀父も今日の撰擇ふ入れらるとこれば試數の准備進退ら
志賀父ふ問ねて諭しつ又吾足齋ふうち向ひて和老へ吏の果るまで終
日ふ在んへ要なし宿所ふ退りて吉左右を俟て便宜るべれとのまそ
吾足齋歡び羨ていそぐ宜しくと応まれば朱之父も主人父子ふうち向
ひて口誼を演る開ぐ程ふ両個の若冨黒茶とりそ来て這客親子ふ薦る
つ更ふ主ふうち向ひて准備宜くいと告るを政朝うち笑て志らば出仕と
いそぐまを志賀父も疾立れといそぐつ吾足齋ふ辭して父子共侶ふ
儘奥ふ退りしかば吾足齋へ朱之父を留めく立まくまる程ふ一杯茶時咽
れまろるさそく宿所へとそを罷出ける有恁し程ふ志賀父政賢へ遽
まく奥ふ退りそ父ふ向ひて咽くやう大人へいるふ思食けん彼末朱之父ぞ故

皎たる女子の愛べる艶冶郎也。言語応答の浮薄なる武芸を勝れ者に似ざるを今懇に他を試撃に召具して我们さへに面目を失ふもやいかん。去る戌御深念に欲と問ば政朝沈吟して小え我も亦そを思ひ及ばざれども人いちも見ぬよりは者也。昔の牛若御曹子楠正行新田義治皆是美少年にして武芸に千騎萬卒に敵するに足しぬべき他其類多くもとも御用に違べる者多らば薦挙て當家に留めん若亦不覚を取るあらとも我力の及所にあらざる其折に追退けて當家譜弟の壮佼者の武芸を都鄙に知せんの加旃他ぐるに昨日既に君侯に上へ申けるに今はらに省べがたし然べとそ我見眼貴のあるを吹挙まるに知るべ人に知るべらん然のみ沾むとて論せば志賀丸再議に及ぶ仰宜是に理りん是に就てもいなる頃五吾足齋の女児晩稲ならんを娶まく

思ひ心恥じ怒ひるべ晩稲ぐ悪瘡愈たりとも今其親と兄とを見て思へば愛べる少女に弄の御心安らそんと陪詰れば政朝含笑て然べとよ其ゆるを我始より那婚姻を許さぬ所以あるゆそ。晩稲ぐ悪瘡愈りと雖ども後に五吾足齋を召近つけて試けるに只是浮薄の小人なり。遊莫其子朱之丸に五吾足の實子にあらざる乾児なり と欲ふ親に似ざる者ならんと思ひ空負ゆく我も亦疎忽の失是面瞻仰て噫漫なり。時もや移らん疾くとのそぐて親子衣裳を改めて供の若黨碁頭に准備の武器を持せて朱之丸と相俱に試撃場にぞいそげ。然べ這ヨヌ賀曲膳政朝に其妻三稔に前に世を去りて志賀丸の外に児子なし。但年三十有餘なる妾あるのみの故に新婦を欲

あて。其子志賀丈の為ふ。専々婚縁を求めゝるべゝ。話分両頭ふ程ふ。大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能い京師の旅宿を立去りて。本月の上旬近江ゝ観音寺の城下ふ来りけるふ。佐々木家の兵頭高嶋石見丈好純い。楽六の父ゝりけ。峯張九四蔵通世ゞ為ゆゝ。兵法七書の弟子ゝりゝふ通世ゞ世を去りゝ後い。胡越の似くゝりて行く。相訪ふともゝるゝのゝゝ。四郎楽六も豫より。其名ゝゝい兮知りたれゞ先ゞ高嶋氏を訪ふ。彼人の意見ふ就ゝゞ。萬事ふ便宜ゝるべゝとて。共ふ城内ふ找を入て。甲乙ゝゝ人ふ問ゝく。石見丈の宿所ふ来つ。姓名を告来意を演て。対面を請ゝかゞ。好純も亦豫より。彼子あり彼孫ありゝと。知らざるふあらざ身ゞ。身迎入れて対面ふ。看茶の礼事畢りて。杜四郎楽六主僕ゝ。宿願のゆ武者修行のゆ。且當家の武功を景慕の故ふ。幸ふ舊縁

ある。主人の資助を借んとゝ。推参ふける事情を演説可寧ゝりけゞ。石見丈欣美てゝゝ。訪れゝゞ。我身遊倅ゝりゝ時。難波津ふ游学ゝゝ。峯張翁の教を受ゝを思へゞ今い昔ふ倣ゝゝ。其わふ和殿ゝゝ高幼仙ゝりゝかゞ。迭ふ面善ゝるゝねども。楽六刀祢の面影い故翁ふよく肖ゝ。刎又大江主の尊大人ゆ昔我一面の好あり。小後奴ゝの不幸のゆ。風の便ふ消ゝかども。其比我も憶ゝる。失粘失特の憂あり。小後家督を継嗣てい。紈袴ふ暇あゝとゝく。這里ゝ浪華人路の程三宿ゝゝゞ。往還自由ゝゝ。年来疎闊ふうち過ゝふ思ひゝけゝゝ。両才子ふ訪ゝとゝゝゝ。外ふ宿りを求んより。我ゝゝも這里ふ居ゝゝ。せ所歎待ゝゝゝ。當れ潘中ゆい忠義の士武芸熟修練の壮佼のゝゝゆゝゝゝゝゝ。異日面會ゝゝゝ。損友ゆゝゝゝゝゝ。且ゝゝ甘ゝゝゝ。忘ふ家の

老僕を召て乾淨なる小室へ件の主僕を誘引せて开里を起臥の處と定め且湯浴させ夕饌を薦めて款待特に浅からぬ。小後主人の妻も出て其の両少年に對面あけり。ゆくゆく石見次好純に獨子あり。高嶋硯吉郎妻純と唤做して今茲に十四五歳なるべし。尚遊俠けるとぞ當春主君に願ひ禀して遊学させて彼地に在り。今い對面由なけれども好純の姪なりける長橋倭大郎勢恭及兵法の弟子なりける家船筭弥知量と唤做して共に十七八歳なる義勇の両少年ありけり。國守の近習なりけれ。勤仕の暇毎に朝となく夕となく高嶋の宿所に詣来て師説を受ざる日のなければ大江峯張両主僕に一番言語を交へしより迭に其才其智に愛て捨がたく思ひあり。只是のみにあらず好純の弟子も亦弟子なるも親しく聚ひ来て文を談じ武を講ずるに其才大江峯張の左右に出るに及ばざりける。左右なる程に國守の命あり。當城内なる壯健なる武藝を御覽あるべしとて。豫より下知せられしかば其撰擇に充らるる少年等皆勇立て秘言古に暇あらずして四郎柴六郎義氏。石見次に請ふて好純亦這少年等の做をなるべしと思ひしかば躰て主君に申え上て既に免許を給はりしより。當日の准備武器身甲衣裳兵鞋に至るまで主僕盤纏に置しかねば思ひの隨に相整へて其日を遲しと俟ける。却説是年の秋九月十五日。當國守佐々木六角彈正大弼源高頼主（嫡子の時の人相稱て。ゆくゆく近江の郡司なるべし。）軍旅の暇あるとて。城内なる少年等の武藝を撰覽ぜんとて本日巳の比及より。儲の架屋に着坐あり。其事の為体縦六十間横九間なる。走馬場の中央に五間四面の架屋あり。俗に云馬見所即是

四目結の花號染做なる。茜土紫の幔幕を引旋らして。處々を括揚る。
裡面に金屏二雙建連て真中に儲の発見あり高頼則烏帽子を
戴て。縹絁綿の時服に長袴を穿下し。小刀を腰に帯てゐる中啓の
扇を把つ。件の発児に尻うち懸る。左右に文武の長臣二十餘名ヨヽ賀
典膳政朝。高嶋石見次好純を首に共に朝服の袖を連ねて。齊を整へ
と侍坐る。後方に近習の輩。童扈従等或い主君の太刀を執り或い唾
壺鼻紙台を相捧げて。謹慎仕へ。其の他架屋の左右に鳥羽の鎧
二十條弓矢二拾張を飾立て。其隊の頭人隊兵等と共に這里に在り。架屋の
東西十四五丈に。試驗を召る少年等の集會所二箇所あり。西の方に二十
名。東の方に二十名。各次副の老兵あり。東西架屋の四方に。幕串建て幔
幕を曳繞らし。裡面に細縁の薄席薦。四五十枚布做る外面に。究

竟る良馬四十餘頭。磨立る鞍鐙して。各両個の鑣奴等。絆を執り
てを立りける。又只是等のみならず。這頭る左右の小堤に。袖搦の竹牆を締
連れて。西の方に安土あり。數言固の走卒二百名。各布袴の稜高く結て。藤
柄の両刀を跨へたるに。赤樫の捍棒を處々に。非常に備ら
る。是日試驗の進退を奉りける頭人四五名。各騎馬にて。東西に別れて
立り。約莫試驗の少年等を。我る時に大鼓を鳴し。退く時に銅鑼を。
隊配に。閑々ざりける折ら。秋の季に。馬場の左右に長小堤に。菊
這那里に咲乱れる。白花あり。黄色あり。況松栢の蒼然たる。獨楓の折を。
白に真紅なるあり。黄黑も交まり。鳥い梢躍れて。聲外に。馬の嘶立く
無と。俟り。其の日い朝より天よく晴て。風さへ枝をならさねば。馬蹄の黄土も
莫く。沼起ず。其方ざ面の人々い各勝を祈られ。共に東西なる集會所に在り。

高頼馬場殿
衆少年の武芸を
観る

その他試數の少年等の伴當奴隷夫役等まで各其主に引添ふく咸東西る幕の内外に集合て混雑をりける。有恁而その朝辰の時候より試數を創りて東西る少年等隊より定められる一番二番の次第と奈さまど蒐大鼓に従ふて東西齊をく出て來る。或は剣法槍棒白打迭に沿る所とりて。雌雄を爭ふ者二十番。記録の祐筆其甲乙を字一つ付て主君に呈覧をりける。是よりまて又走馬の遲速を試らるる。更に闘射の勝負あり。弁び中に弓矢の故実に勝れる者共に並撰十番を射て君の撿覧ゆそ備へける。然ば試數の少年等その日を晴と打扮たる戎衣勒肚腰刀衣裳甲冑腔衣に至るまで孰も錦の上に花を添て疎るる人なし。負る者は色を失ひ勝たる者は意氣洋々と式禮をそなる退ける。既にして事果て高頼主は件の少年等の武藝の甲乙を覧しめふ。就中多賀典膳政朝の獨子なる志賀久政賢并に高嶋石見久好純の侄なりける。長橋優大郎勢恭及其弟子象舩筭弥知量等は。試數の本事抜萃ゆそ。射藝も亦人に讓らぬ後と取ると絶てるければ。高頼感悦大々さるべき。躰て架屋に及ぶ。せく誉て當坐の牽出物に有名の刀各一口を被けさせ給ひ。政賢勢恭知量等は時の面目身にあまると。共に君恩を拜しまつりて見る者皆く者嘆賞して羨まざるなりけり。當下典膳石見久は俱に席を降り主君を拜して。政賢勢恭知量等の為に恩賜の鈦び。禀果て又云ふ。昨日も少えまつりし如く浮浪武者修行の五少年の武藝を御覧あるべきに既に今朝より召俱して。東西る集會所に在り。臣政朝に因て今日の試數を願ふ者は當城外る醫師也。五郎足齋延明の乾児と云へり。末朱之介暗賢及臣好純に舊縁の両少年。大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能等。

即是人いふ計ひけりや。と言語齊く請禀せば。高頼ゆゑ〻點頭す。現
然者もありけるを。支ふ紛れて去れり。遽莫我家の少年等の試驗ふ既ふ
支果たるふ茲より敵を出さん要ふ。其少年等と相番せて弓馬槍法を
一覽せ。約莫両軍相逢ふ時。遠ふ矢を射出し。敵の一陣を乱さば。近
ふ必槍を入れて突頽さる。勿論之然い今の戰場ふ士卒の器械弓矢
と槍のみ。是ふ勝者何狄あらん。其の意を其少年等ふ伝へ。准備を急ぐ
べ。其の餘の箇様〻〻如此〻〻ふ致さべ。と言語急迫く吩咐ふ。
政朝好純美く。猶も架屋ふ作りたる志賀丸と倭大郎等ふ御意
趣云云と示して准備を急ぐ。されば志賀丸と倭大郎ハ心得果て東西
る。集會所へ走去りけり。是よりの後時を移さず。准備整ふ。と雖
進退使の老兵二騎馬を東西ふ乘駐て。東の少年未晴賢西ふ少

年峯張通能出て勝負を決せむ。と相呼ひ共ふ扇を抗て指招ば。
早打鳴も莫大鼓の鼕〻〻なる高音と共ふ東西齊一馬を找る。未峯
張ゲ丸の目の打扮正ふ是一對ふ。黑草紙の身甲ふ元浪腸綿袴ふ金囉
紗の戰絶。元青緞の加裙袴を穿下して。頭ふ裏銀る。戰笠を戴たる
腰ふ両刀を跨做して甲脛衣も黑ふと要とも。馬ふ純黑の逸物ゆく。
東西俱ふ腰勢る。ふ各一條の習学槍を挾て。馬を徐〻と找めた
る一箇是白面の美少年。臥蚕蛾の眉丹花の唇。女子ふ比べ見まゆ。昔
鞍馬の御曹司も。かくやと思ふ可るふ一箇ハ赤面でもある。勇士の英威
風凛然面の色淺桃紅る。星眼清く鼻高く。肋骨の逞しけるは。昔
紫の八郎主ふ及ぶまでふ。あらむとも。必覚ある者ならん。と衆人固唾を
飲ぬいる。登下朱丸の晴賢ハ敵るの姓名記憶ある。彼十三屋九四郎

弟ゐりーと豫守く峯張楽六ゐりければ。且敬馬に且怪ミて。心ふ十二金鬼胎ゐ。他いゐりて今日の試數ゐふ召入られるやらんと思ふのゐ。毫も撓まぎ素ふゐ無敵の豪奸ゐれば肚裡ふ又思ゐ。往る夏の夜彼奴ゐ為ふ追逼られて。彼財嚢さへ採復されゐ所以ゐるゐ中。其打我身ふ寸鉄ゐ。且牢獄疲労ゐ。旅賀力衰へられば。先度の遺恨を復さんと只ゐの一拳ふゐゐ中ゐと尋思をゐくらふく騒ぐぎ。楽六も亦朱之仗の姓名を今ゐ。訝をゐくく其面影を見まゐ果して其人人。今日の敵ゐいヨメゐらんふ。彼奴ふ逢ゐて幸ひゐると思ひの隨ふ突伏く。時宜ふ依らば往ふ夜叉の一百九十五金のゐも責問ゐゐ已べゐと。思へ勇ゐ氣十倍して。既ふ我むる馬の脚搔ふ鑣兒の音も鈴ゐと臨機応変便宜を料る。智ゐ中心ゐ遠慮ゐ。勇力士の心と表裏ゐ。朱之仗も馬を找めく。東西齊ーく加本屋ふ向して。

馬上の式禮形の如く。両拍打れて馳違ふゐる二馬の駿足目覚く。駈を兼ゐる者両三遍程よく両敵相對して聲を合せく働出も槍の梢頭ふ電光石火の内めくふ異ゐらぎ。将ゐの槍ふ真物ふゐらで。梢頭ふ小毬の像ゐ括りたる布の囊ゐ。囊の内中ふ溢るくまぎふ蛤粉をヨヌく絡ゐれば。働る者ゐ顕然ゐ。その迹遺らざるふゐ。ゐの故ふ末峯張の衣裳も馬も東西都く。黒ゐ色を着用せらまくゐ。間話休題。小程ふ晴賢通能ふ威力を出ー修錬を盡ーて。挑戰ふ者半晌許。劣らぎ優ぎ見ゐ兀自朱之仗ふ自得の藝術修錬の上も透間ゐ。又楽六ゐ師傅の槍法藍より出て藍より青ゐ。一人當千ゐりければ晴賢竟ふ敵ーゐぎ。這里を働き那里を突れて。黒ゐ衣裳も馬さへふ只雪の日の宗山子の像く。總て真白ふゐりふけり。かくてぞ朱之仗晴賢ふ腕乱ゐ眼眩くて。吐嗟目今馬上ゐ。働

落さるべう見えしかば進退使の老兵扇を抗て。彦よや両少年よと止めて。
勝負い既ふ分明へと喚る聲と共侶ふ打出す銅鑼の響音ふ染六も
自由と成ぬ。今一番朱之介奴と。働落もべうしふと思へばらふ不樂ふ
げふそぶ儘馬を乗退ばば朱之介是幸と一番時馬上ふ喘を止めく。
進退使ふ向ひ。御尚ふも三賀主ふ禀ふ如く在下槍法い人並の
本事ふ只是弓箭ふ。百發百中の段あり。いくぐ這次の試數ふ。
射藝を試めくと聲振絞りて乞求ば。進退使微笑て開ふ左も右
ものるべし。且退ふく休息ふとふふ染六も會釋ふ。躯て東西ふ別
れく。集會所へ退く打。染六ふ架屋の這方ふ。下馬ふて笠さ脱捨て。國
守の面前ふ過りく。其為体禮ありと。誉ふ者ふなりけ。是ふ為ふく
架屋ふ君臣件の両少年の。武藝を云云と批評しく。俱ふ笑局ふ入日刺

き。景ふ短ふ秋の天末狹申狹鎬々と遠ふ山院の鯨音と。俱ふ亦復打
鳴き。蒐大鼓ふ従ふく。進退使の老兵二騎馬と東西ふ乗出しく。扇を
啓ふ指招ふく。東の少年末朱之介晴賢西ふる少年大江杜四郎成勝疾
疾と喚ば。成勝晴賢阿と答て。東西ふ別しく馬を找る。打扮前と同ど
からぎふ立と腰刀と除くの外戎装衣裳両敵共ふ咸淡官縁ふらぬい
ふく。背ふ白羽の箭前を駝做して。左ふ握大ふる重藤の弓を推へく。桃
花の肥て逞ふ三歳駒馬ふ雲珠鞍置せく。鞦寛ふ乗做したる。両敵共ふ
一對の美少年と見ゆるのふく。大江杜四郎成勝ふ骨法朱之介ふ立優り
其面影の花ふ似ふく。最美しふ。ふるふ。威風凛々たるも凄ふらぬ。壁ふ対ば末
朱之介ふ其眉目前ふ絲ふ似ふく。美しけ。とも天然ふあらぬ。又大江杜四郎ふ
容止の艶ふやふる。雪中ふる梅花の如く。風ふ春知る櫻ふ似ふ。見ふる牛若

御曹司の後身とも云べけれども心ある者は評しける間話付題「小程ふ
朱之丞晴賢は既ふ心ふ計り〳〵如く造回弓箭の勝負ふ於て水六郎を破滅ふ
傳て先度の怨を復さんと思ひしは虚憑也殊人を遣ひ本意を遂ねど往
る夏十二屋の店前也。竊聞きける夜其名を知る杜四郎成勝也。指敵ふ
あらねども彼奴も宛家の半隻之允ものかと思誇り〳〵面色を四郎
成勝遥ふ見て毫も擬議せず馬ふ拍れ其舊地ふ馳出ひ朱之丞も後ふ
とて程よく地方ふ馳ふ出ける。這回は騎馬の的弓ゆく。両敵二丈箭と定められ
縋ふ二寸の金的を安土の邊ふ掛られる。然ば末大江の両少年は箭則を拔出
馬を飛して箭程を測りて彈と射る共ふ覚のる煆煉ふあらねば的の真中
貫ける。是より二箭三箭迄杜四郎は虚箭なくて正ふ皆中の巧言あり。又朱
之丞晴賢は一箭二箭は的中あれども第三箭は酷く前ふ。安土の礎を射

削られ鏃碎けて怪蜚なり。是也甲乙分明なれば杜四郎も共ふ下馬して
安土の邊を過る時朱之丞は腹立さふ一個の進退使ふられ向ひて聲高
ふ論ずる。言無禮ふ似て烏滸なれども的は只是死物の動静進
退自由なる人倫禽獣と同じかるも然ば戰場ふ於ける時敵豈大小の的の
如く動くもして我箭を受んや。其故ふ小可は年十二三なりし時より翔鳥を
射て的と好まる是を以て今の一失也。其の理を思召されむと敦圉猛懦
言を高頼主洩ぜて理りなりと思ふ程ふ時既ふ秋の季なれば創めく
渡る天津鴈の一行這方へ来ふけるを高頼遥ふ瞻仰て。ものを究竟なるは物
とそあれ晴賢成勝両少年は那鴈を射て落させよと仰ふもそ近習の
士曽根見五郎平。櫓廊ふ走出て末大江の両少年。國守の御意ふは
そ今来る鴈を射て捉へ疾々と言忍せば末も大江も阿と答ふ心許なく

思へども。舞ふべき時宜なきなれば。共ふ弓箭を把杭げても。雲居迥ふ遠ざかる其鴈約莫十隻あまり。架屋の邊を過る時。箭を掻抓きて投上げれば。日足ゆゑ驚く一行の鴈ハ乱れて降り来る。箭程と量て。末大江克弯固めて。弦と射る。修錬達ハ。二隻の鴈地上ふ着羽と。隊ヲ分て。架屋ふ行る。光黨近習。憶ハぬも。聲と合て。射ふりく。と。誉ふけり。登時両個の進退使ハ。透さず。二隻の鴈と。押え。躍く。架屋へ。参りて。君侯ふ見せ奉ふ。朱之介が射ふり。鴈ハ腹より。背へ射串れ。まゝ。鮮血ふ塗れて。既ふ死ヲ。又杜四郎が射ふる鴈ハ。片隻と。縫ひて。身と傷らねば。逃まく。欲する勢あり。高頼是を得と見て。感悦。特ふ浅くぞ。且ゝ。成勝。晴賢。両少年の。射藝ハヨヌく。ゐるがさけれども。生ハ難くして。死ハ易ふ。這回も。成勝勝るべし。先ゝの旨と。仰ぐよと。仰ぐ進退使。ゐるゑて。出て。件の両少年ふ。御意云云と。宣示せば。朱之介。

其義。御諚。でハとも。已ぞハ。感心。ぐ。何と。ゝ。軍陣ふ。敵と。射る者。其箭。彼身と傷らぬ。して。鎧の袖と。縫ふ。是。大功と。且。翔鳥ハ。殺さぬも。猶易ふ。両敵。東西ふ。馳違ふ。乱軍の中ふ。指も。敵と。射て。隊を。ハ鴻鴈。飛鳥の類ふ。あらぬ。いで。目今。成勝と。射騎の。勝負と。試。非。如彼。箭ふ。身と傷られ。死。とも。然ふ。進退使。已と。ハ。ぞ。晴賢。が。意ふ。所。留。様々。と。ゆえ。上。高頼。主。苦笑。して。扨も。末。奴。ゴロの。強さ。ゝ。ゐ。とも。今日の。試。數。ハ。人を。殺さ。為ふ。あらぬ。然ハ。鏃を。接去。て。箇。様々ふ。計られ。杜四郎と。今一度。射騎の。勝負と。決。するもよ。ウン。准備。せよ。と。急。ゆへ。進退使。頭。衝。兼て。かゝるべしと。知らぬ。ハとも。鏃。ゐ。箭。も。豫。より。聊。准備。仕りぬ。と。應て。躍く。出て。走る。末と。大江の。両少年ふ。再度の。御諚。云云。と。言語。急迫。く。宣示。ゐる。大江。生ゐ。馬上の。闘射。

願いて秋いふそやと問はせ杜四郎敢異議せず仰兼りゆひぬ左も右ふも晴賢の隨意一箭仕らんと言大人に即答ふ進退使ふ歟感じて准備の征箭を出し多つ是を両少年ふ示しとらせ各先ず箭を見よ鏃ふ代るふ最小る瓢とのそ者る故ふ射て中るとも彼身を傷らず反て其迹分明ならん故何とぞ瓢の底ふ穿る穴數多内中ふ桐灰粉を籠たれば勿論各二箭を渡しとも三ヨヌ射出ものを許さず但其箭を受る者ふ間ふ不便ならん前後ふ聞ふ依るべしとそ長短ふ紙索を出して末と大江ふ披きるふ朱之丈ふ長ふて披ふて支の始ふ定められ其歟び大かさらず各彼箭二條と小盾一枚を受取り左りふ弓を挾み鞍の前輪ふ掛て馬ふ内りとち跨れば又打出す蒐大鼓の音も烈しく再度の晴技朱之丈晴賢ふ這回ふ四郎奴ふ白泡喫せるとなんと思ふ威勢阿脩羅の像く馬と東西ふ馳錯せて透間を射まく欲されども大江ふ騎馬の達者ふて馬さへ駿足なりければ秋の胡蝶の閃く如く風ふ木の葉ふ散るよりも本蹄進退自由を得たり猛く勇める晴賢ふ三ヨヌ前程を過りける然ばその勝負と見んとて衆少年も伴當なるも集會所を出て来り埒の邊ふ身を亀ゆくふ歩くと思ふヨヌる況峯張楽六ふ集會所の幕の間より外目も揮らずこち見て在り然ば又架屋なる主も家隷も今日の見物ふ只ふの一挙ふ有りけりと思ふそれそれの中ふ高嶋石見ヨヌ賀典膳長橋侯大郎象舩美弥志摩ふ政賢なる曽根見五郎平ふ至るまで免許を被り席を設て倶ふ架屋れ檐廊の左右ふ出て是を見る扨ては秋の夕風ふ左右ふる小堤ふ色を増し梢ふ高く丹楓葉の散蒐りぬる光景ふ天塚ふ狂ふ赤卒の群飛ふ似て最興あり有斯り一程ふ朱之丈ふ敵るの人馬の疲労をまて箭程を揃

八幡太郎義家の弟
杜四郎
朱之丸を
射る
杜四郎

朱之丸

ぢく〻丁と射る那時遅し這時速し杜四郎は片鐙を閃りと外を至妙の剽輕鞍懸れと走てけ見べ未が射る箭は徒ふ遥ふ飛て落ふけ朱之仆は一の箭を射損じたれば心慌て杜四郎が鞍局ふ居置る處を丁と射る二の箭を四郎は小盾を以て發矢と受る神速精妙其箭後方ふ反復る朱之仆の馬の鼻面を下高ふ打しかば馬は嘶て跳狂ふて駐るべくもあらざりしを朱之仆は辛くして乗鎮めそもかひそ始の廣言虚と云て箭は必既ふ盡しかば且呆れ且恥て姑且馬を駐めて在り當下四郎成勝は盾を曳哩と投棄て適ふ晴賢主迭ふ守の御意ふ因る約速でれへ已も一箭前まあらぬ程よく受のとらせも果むふふや及ぶと朱之仆は弓を棄小盾を取りて俱ふ馬をぞ找めける此の段爰ふ盡しがたし又下の回ふ解分るを聽給へ。

村田

新局玉石童子訓巻六之十一終